



一般社団法人日本消化器癌発生学会

News Letter

<http://www.j-sgc.org/>

2018 No.2

第29回日本消化器癌発生学会を 開催するにあたって



第29回日本消化器癌発生学会総会会長、国立がん研究センター先端医療開発センター長 落合淳志

近年の分子生物学的解析より、がんの発生・進展過程が多段階的な遺伝子変異、エピジェネティック異常、炎症や免疫状態の変化などにより引き起こされていることが示され、様々な分子標的剤や免疫チェックポイント阻害剤の出現により一定の効果を確認できてきました。一方、薬剤不応症例の存在や薬剤抵抗性など新たに解決すべき問題が出てきています。特に近年の研究では、がん組織構築の複雑性や細胞内および細胞間の分子機構の複雑性が、がん発生・進展だけではなく、薬剤抵抗性などの制御に重要な役割を果たしていることが示されてきています。

このような背景を鑑み、第29回日本消化器癌発生学会総会のテーマを『複雑な組織と分子を解く』とさせていただき、これまでの消化器癌の発生に関する形態病理学的な複雑性に加え、高感度・大量解析技術の革新を基にした遺伝子情報、遺伝子発現情報、蛋白そしてそれぞれのシグナル伝達などの分子情報とその複雑性について考えるため、4つのシンポジウムを企画しました。シンポジウム1：がん病理－治療法開発のための複雑性の理解、シンポジウム2：エピゲノム－しなやかで複雑ながん、シンポジウム3：ゲノム解析－消化器発がん機構の多様性、シンポジウム4：がんメタボローム－マルチオミクスによる複雑性の統一、として国内のトップの研究者によるシンポジウムを行いたいと思います。また、特別講演として、がんの複雑性の数学的理解のために、東京大学大学院総合文化研究科の金子邦彦先生「遺伝子発現ダイナミクス、ロバストネス、可塑性：相互作用力学系に基づく細胞分化理論」と新しい光免疫治療を開発された米国国立がん研究所・米国NIHの小林久隆先生「がんの光免疫療法：消化器がんへの応用について」にそれぞれお願いしました。これからの消化器癌発生の基本を考えるうえで、これらのシンポジウム・講演が若い研究者たちに新しい研究の糧となればと考えております。本学会に参加される先生方により、消化器癌の発生・進展とその治療と治療抵抗性などについて、複雑に絡み合ったがん細胞の発生、増殖、生存の分子機構の一端が明らかになることを期待します。また、企業展示においても、各企業の新しい技術の一端を見せていただけるよう配慮いたしております。

日本各地から東京の地に集まっていたいただき、本学会総会において、先生方に複雑ながん組織とその分子機構を理解し、がんの理解を深めるとともに、新しい治療への礎となることを祈念します。どうぞお誘いあわせの上、第29回日本消化器癌発生学会総会にご参集いただきますようお願い申し上げます。

『第28回日本消化器癌発生学会総会、 第9回国際消化器癌発生会議』を終えて



熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科学教授 馬場秀夫

2017年11月17日(金)、18日(土)の2日間、ホテルメルパルク熊本にて、第28回日本消化器癌発生学会総会、第9回国際消化器癌発生会議を開催いたしました。熊本では1999年に、小川道雄教授(熊本大学第2外科)が第10回の本学会を開催されており、18年ぶりの開催となりました。

今回の学会テーマは、これまでの研究を通じて見えてきた課題を捉え、消化器癌研究の“未来に繋がる実り多い学会”

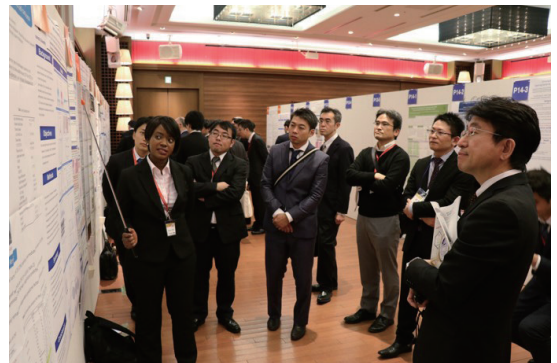
になることを期待して、『Look into the Future in Cancer Research』といたしました。今回は国際消化器癌発生会議と同時開催であり、Joan M.C. Bull先生(The University of Texas Medical School at Houston)、Heinz-Josef Lenz先生(The USC Norris Comprehensive Cancer Center)、Jimmy So先生(National University Cancer Institute, Singapore)、Ajay Goel先生(Baylor University Medical Center)という高名な研究者を海外から講師として招聘し、これまでの研究成果についてご講演頂きました。

シンポジウムのテーマとしては、①癌代謝を考えるー臨床応用へ展開を目指してー、②腫瘍微小環境の浸潤、転移、薬剤耐性への影響、③癌ゲノム解析に基づいた個別化医療、④消化器癌における腫瘍免疫と治療への応用、を取り上げました。シンポジウムにはたくさんの演題を応募いただき、一般演題(口演、ポスター)を含めると155題という多くの演題をいただきました。いずれのシンポジウムにおいても最先端の研究成果が報告され、活発な質疑応答が行われました。

今回は、4人の先生方に特別講演をお願いいたしました。“特別講演1”では慶應義塾大学医学部先端医科学研究所 遺伝子制御研究部門の佐谷秀行教授より、胃がんマウスモデルを用いたがん幹細胞の成立とがん進展の関係、治療戦略についてのご講演を賜りました。“特別講演2”では、熊本大学大学院生命科学研究部 遺伝子機能応用学の甲斐広文教授に、平成29度から熊本大学と地域企業が連携して新たにスタートした天然物創薬プロジェクトの研究体制ならびに希少疾患から慢性疾患への展開に関する研究成果をご紹介いただきました。“特別講演3”では国立がん研究センター先端医療開発センター新薬開発分野の松村保広分野長の研究室にて確立したEnhanced Permeability and Retention (EPR)効果と関与する抗体についての知見をご紹介頂きました。“特別講演4”においては、金沢大学がん進展制御研究所 腫瘍遺伝学の大島正伸教授に遺伝子変異の蓄積・炎症性腫瘍微小環境と大腸癌悪性化機構の関連についてご講演賜りました。

大原毅賞は、九州大学大学院 消化器・総合外科の沖 英次先生が「がん集学的治療を目的としたゲノム不安定性を標的とする新規遺伝子診断法と治療の研究開発」で、田原榮一賞は、札幌医科大学医学部分子生物学講座の鈴木 拓先生が「消化器発癌におけるDNAメチル化異常の機能的意義の解明とその応用」でそれぞれ受賞され、記念講演をされました。それぞれ最先端の知見に関わる興味深いお話をいただきました。さらに、今回は、新進気鋭の若手研究者に最新の研究成果を発表していただく「Young researcher presentation」というセッションを設けました。発表いただいた5人の先生方 藤井正幸先生(慶應義塾大学)、神田光郎先生(名古屋大学)、安藤幸滋先生(九州大学)、石本崇胤先生(熊本大学)、早河翼先生(東京大学)のプレゼンテーションはいずれも素晴らしく、この発表を契機に今後更に飛躍されることを確信いたしました。

日本全国から455名にのぼる多数の方にご参加頂き、成功裡に終了することができました。会員の皆様をはじめ、ご協力いただきました関係各位の皆様にご心より厚く御礼を申し上げます。



発行 一般社団法人日本消化器癌発生学会事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-15 6F 株式会社クバプロ内
TEL : 03-3238-1689 FAX : 03-3238-1837

発行日 2017年10月23日

発行者 一般社団法人日本消化器癌発生学会

編集 総務委員会